

天竺行路次所見

北畠道龍師著述

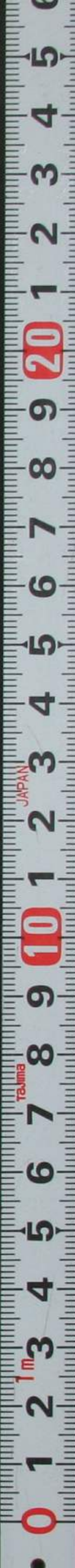
二

和装本

ル 7

3353

2



門九
號3353
卷2

北畠道天竺行路次所見卷之二

北畠道龍師口述

門人

西河偏稱

長岡洗心

筆受



英國の事狀既上終て更に阿蘭陀及び佛蘭西を
經て再び奧國に入てプロフエシヨル、スタイン氏の
約を踵んとするあり然るは一昨年來經查する所の
噶國瑞典阿蘭陀、ホーランド、エルザツツ、バイエルン
等の小國の事狀の如きは未だ記するに遑まあらざ
りしが何れも其の國の部内を見るに其の百政の如
き渾べて各太國の政體に摸倣して立つ所のもの多

天竺行路次所見卷之二

早稲田大學圖書印
第25.3.7
冊

きあり即ち周末戰國の時天下既すなはち六大國（漢魏燕趙
齊楚（及び十餘の小國（宋魯鄒滕薛鄭等）と分れて其の
大國の如きハ（帶（甲百萬互（は驕（大王立（して其の傍（ら
殆（と其の國（无（が如く天下の大勢專（ら六大國の手中
に皈（して其の小國の如きハ唯其の鼻氣（を窺（ふて僅
に立（する者の如きあり是を以て其の大國の如き
ハ聳然（として頗（る見るは足る所のもの多（いと雖（へ
ども其の小國の如きハ靡然（として殆（と見る可（うら
ざる者の如きあり故（に其の大國の大體を見れば小
國の小體ハ見るは足らざるあり今現（は歐洲の實況（

を見るは亦（と洵（は昔時支那戰國の形ち（は似て其の
國の大數を云へば一朝（は數（を難（いと雖（へども其の
威大を云へば獨逸（、奧地利（、露斯（、亞佛蘭西（、英利斯（及び
伊太利（の六大國の如きハ其の威稜（の高大（ある宛（も
六大山の群小（は卓越（するが如く其の陸海二軍の具
全（と及び其の文明政治の修正（するは於けるや昔時
支那六大國の詐妄（百出不政（不文（あるの比（は非（らざ
る也是を以て歐洲の大勢殆（んど是の六大國の下風（
は皈（して其の餘の小國の如きハ實（は衆星の大月（は
對するが如き者あり然りと云へども其の小國の尚

未だその己を失はざる者ハ蓋し一般文明の權衡を得るを以てあり是を以て其の大國の大體を見れば小國の小體の如きハ列は論ずるは及ばざれば今特其の記載を要せざるあり然るは小國と云へども其の一二の見る可き有る者ハ亦記載することも有る可きあり

然るは一昨年六月の夏休みに際して避暑旁の瑞典國は行んと欲して即ち旅具も装ひ一のハ一朝獨逸國柏林府を發して「ハンブルヒ」府に至り同所より又艦卓に乗り「コルセ」と云ふ所に至り爰より又乗

船して「瑞典國」の「コッペンハーゲン」と云ふ所に至り又同所を午前第十一時發航して翌日午後第二時瑞典の「マルモ」港に至り遂に其の都府「ストックホルム」に到着して即ち有名なる「グランドホテル」と云ふ宏大なる宿に投宿したり

此の瑞典國ハ殆んど北緯六十度の位に在る歐洲でハ最も北邊に立つ所の邦にして此の節(七月二日)は午後第十一時頃に至るに漸く夜に入り午前第一時三十分頃ハ東天忽ち紅色を浮べて曉とあり然して其の夜と云ふも其の名ハ夜あれども他

邦の夜とハ違ふて其の夜の實況ハ甚だ薄暗^{うすくら}にして宛も日本の秋の夕暮^{やぐれ}の第五時頃の實況^{けいぎ}は同トきあり此の時ハ當つて窓下^{まどした}ハ「チャイトング」(新聞)を展^{ひら}て之れを見るハ文字判然^{まことしやうぜん}として少^{すく}しも讀み難きこと無きあり是れハ依^よて之^{これ}を云へバ此の邦ハ於^あてハ全く晝計^{ひるさか}り^して夜ハ无^なしと云ふても可^べかり此の實況^{じつけい}を見るハ就^すても我^{われ}の身^みこそ遠^{とほ}く日本の地^ちを離^{はな}れて妙^たふ邦^{くに}ハ来^きりしもの哉^やとつらく思^{おも}ふ計^{はかり}りあり然^{しか}る^に土人^{どじん}云^いく此^{こゝ}のストツクホルム府^ふより尚^{なほ}五^ご十里許^{じゆり}りも北^{きた}の涯^{ぎは}ハ行^いくと即^{すなは}ち今^{いま}もても三日位^{さんじつぐらひ}位^{ぐらひ}ハ

日輪^{ひしん}を見通^{みとお}し^して全く夜^よと云^いふ名^なも无^なき也^{なり}と其の上^{うへ}へ有名^{ゆうめい}なるゲオグラフィプロヘツシヨル^{地理}學^{がく}の博士^{はくし}「ハルデンシキユール」氏^し同^{どう}氏^しハ世界^{せかい}の極^{ごく}輪^{りん}を八^{はち}度^ど回^{くわい}經^{けい}されし人^{ひと}にして北^{きた}畠^{はら}親^ま密^{みつ}の友^{とも}あり(の云^いわゆるハハ此^{こゝ}の瑞典國^{スウェーデン}より北^{きた}航^{かう}すること九^く晝^{じつ}夜^やにしてアイスランド^{アイスランド}「氷^{こおり}の國^{くに}」と云^いふ氷^{こおり}の邦^{くに}ありて此^{こゝ}の邦^{くに}の如^{ごと}きハ一年^{いちねん}三百^{さんひゃく}六十^{ごじゅう}日^{にち}全國^{ぜんこく}年中^{ねんちゆう}氷^{こおり}ハ閉^しぢ込^こめられて氷^{こおり}の底^{そこ}ハ穴^{あな}を鑿^{うが}つて住^{すま}居^ゐを造^{つく}り窓^{まど}も戸^とも皆^{みな}あ氷^{こおり}の戸^とを以^{もつ}て之^{これ}を塞^ふさぎ人^{ひと}ハ椰子^{やし}の葉^はや海^あ馬^ばの皮^{かわ}を身^みに纏^{まと}ふて衣^えとす其^{その}の食物^{じきよく}ハ夏^{なつ}ハあると海上^{かいじやう}

の氷り少く薄くある時分は當つて海馬の氷の上
は遊び出るを取りて年中の食物は充ると云ふ然し
て全國中いつも氷の世界あるが故は草木とてハ一
本も生ずること無きバ又火を焼くことも火を見
ることあらぬあり其故は鉄を冶して庖丁及び小
刀の類を作ること知らず唯氷を以て庖丁を作り
海馬を割宰すと云ふ適他邦人の來つて鉄の庖丁を
惠む者ある時ハ大に喜んで一挺の贈物は報ゆるは
海馬の皮十二枚を以てすると云ふ也此の邦杯ハ年
中冬計りよして其の春夏秋ハ無くと云ふても可也

り然して此の邦ハ即ち噠國國の領分なきども恒に
本國の介養を受けて聊かも本國の為めはあらぬ邦
ありと云ふ此の如く世界の北の涯に至ると晝計り
よて夜ハ無く又冬計りよて夏春等の无き邦あり
是を即ち親く我が見聞する所あり
又之れを一方は轉じて考ふれば先達て歐洲を參り
掛けのことありし即ち歐洲の東南に當れる邦は
してアラビヤ及びアデン海等を八日も十日も航行
せし此の邦杯ハエクアートル赤道の下を當つ
て彼の瑞典噠國國とハ大に反對よして其の暑氣の

太ど甚だ蒸熱むせあつきある中うく我が日本の大暑あつさの類ひよハ非ざるあり然して此の邦等ハ夏計りよして冬春等ハ元一と云ふも可あり此の如く世界の北の涯いへに至れば冬計りよして夏秋等が無つたり晝計りよして夜が無つたり又赤道直下の邦に至れば夏計りよして冬秋等ハ元つたり此の如く地球上を經回して見ると邦と邦との實際あつさに於てハ四季の長短晝夜の有無あつさの同ドのらざる有る而已いならず又其の人情世態よんじやうせい政治宗教の形状かたちに於ても亦太た一定せざる者ありあり嗚呼世界と云ふ者ハ能くも世界を

成したる者よして釋尊しやくそんの所謂唯識縁起いしきえんぎの工妙實こうめうじつよ其の功曠大こうくわうだいあるもの哉此の唯識縁起と云ふこと、歐洲の「ヒロソフイ」家の「アブソル」ト「世界の大原」と云ふこと、其の義相區別ぎさうくべつに付てハ余在歐中深く論查ろんさする所よして即ち印度「ヒロソフイ」と歐洲「ヒロソフイ」との最も了別りやうべつせざる可らざる所おれども今爰いまよ一朝いちやうに盡し難がたければ他日便宜てんぎんを俟まちて述んとする也是れよ就ても我が日本人民の如きハ以前舊幕の鎖港さくわうの世の中で有つた時ハ唯ぞ支那と阿蘭陀とのこよ交通して其の他の邦々とハ更さらに相交る

こと元あり故は廣く世界の實況を知ることも元
く唯日本より好善ある強國ハ他は決して有ること
無く又日本の刀や日本の米程ハ切き又善き食物ハ
元きありと何も付け歟は付け日本の物程善き物ハ
元一と唯内ちの事計り考へて内程善き國ハ無きあ
りと思ひ澄して居たを「コンクレート」爰計りを考へ
て居ると云ふこと(の考へと云ふあり此の如き考へ
ハ闇昧野蠻國の人民の持ち物としてかやうな考へ
で數百年來徒ら暮せ我が邦で有り故に廣き
世界の實況ハ少しも知らず居たことハ思へば々

々々愧ぢ入りたることよて有りぞのし
然るに明治維新の始めより天子自ら政權を采り内
ち從來の百政を革め外の萬國と交接を開らき何事
も世界の眞理は基ひて公然たる文明の治功を擧ん
とする今日なきハ人民我々も亦は是れ迄での小さ
き考へ(コンクレート)を投捨て「アブストラクシヨ
ン」廣く世界を考へ且す事(の大小ある考へを以て成る
丈け廣く世界の實況を知り詳し其の權衡を了して
運動せねばならぬ秋が來れば人々邦の爲め深
く注意あらんことを希望するあり

天竺行路記 卷之二 七

瑞典國の銀婚

然る所六月六日瑞典の王宮に於て「ジルベルウエー
 ジング」(銀婚式)の大祝宴(即ち木王夫婦の銀婚式あり)
 を開られるに付きユリスツージウム、プロフェツシ
 ヨル(法律博士)オリブクロナ氏等の奏聞に因て余を
 朝廷に招ぜらきて即ち天皇陛下に謁見せ令め合せ
 て此の木式に與ふることを得せ令め多り此の時朝
 廷に於て對遇の都合を以て余が日本に於て如何なる
 位地を持つるやを訊問し及ばれしに付き余答て
 云く日本に於て僧徒凡そ十七万餘も有る可し余ハ

其の第一末班に列する者あり其の所を以て對せ
 らねんことを希ふと云ひ多れば掛りの人々大笑し
 て何より申し合せて然る可く扱はれしと聞く扱て
 此の銀婚式と云ふことハ「ゴルデンウエージング」(金
 婚式)に對して立る所の名にして都て歐洲に於てハ
 凡そ人始めて結婚してより爾來夫婦相ひ共し聯存
 して廿五箇年に至れば之れが為め大祝宴を開ひ
 て之れを賀す之れを銀婚式と云ふあり又其の上へ
 其の聯存すること五十年に及べば之れが為め更し
 大祝宴を開く之を金婚式と云ふあり是れ此の二

礼ある者ハ歐洲古代よりの式礼しきらいよりて今尚ホこの儀を存して夫婦聯存の賀儀がぎを祝することハ都て人情じやうじやうニ於ていと悦ぶ可きの賀宴がえんよりて所謂すわう「ミトロギ、ウイツセンシヤフト」の遺り物あり歐洲ニ於てハ「ミトロギ、ウイツセンシヤフト」(古代の事物を保存する學文)と云ふ一部の學文あつて成る丈だけけ古代の事物じぶつを存養ぞんやうすることを勤つとむることあり是れ亦また人世よを輕蔑けいべつせざる一種しゆゑの好意こういと云ふ可き也又また毎歳まいざい十二月廿四日の「ワイハナフテン」(年越しの祝祭日)の祭日まつひニハ歐洲一般いぱん何れの邦くにニ於ても一家々々の路みち

寢の内いんちニ青松あへまつを立て、夜よるハ之れニ燭しやくを點くわして之れを祝すること宛あつちも我が日本の門松かどまつを立て、新年しんねんを祝すると少すこしも異こととあらざる也是れ皆みなあ「ミトロギ」學の遺贈いまいざうと云ふ可き也嗚呼我われが日本にっぽんニ於ても此こゝの「ミトロギ」學がくが開けたあらハ古今の事物じぶつニ就つて餘程よほどその趣おもむきを愛存あいぞんすることも有る可きあり爾それ後ごハ深く注意ちやういすべき所と存するあり日本人にっぽんじんハ速はやく年としが寄よると云ふ話わ六月二十四日午前第九時ごうじゆうしちよ「ゲオグラフィー、ウイツセンシヤフト、フロフェツシヨル」(地理學大博士)「ハルデ

ンシキユール氏と相ひ伴ひストックホルム府を發
一三時間の艤車に乗じニツチヨビング州の國境に至
り一休して其れよりドロシケ(鐵道馬車)に乗り午後
第五時三十分頃ネベツクナール村のセーデルホ
ルム氏(このセーデルホルム氏ハ瑞典國の大豪農に
して獨逸里數の十五里四方の山林田畑を所持して
居られる即ち「ナルデンシキユール氏の妻の姉婚ぶ
り)の家に着し今夜ハ同家泊翌二十五日ハ當村
の祭日にして村民一同百事休業にして其の悦樂す
る實況ハ全く日本の民情と少しも變ること有るこ

と无きあり此の日セーデル氏の家ハ州の知事公を
始め貴顯の男女三十餘名を招集してアーベント、
ツセン(晩食)の筵を設けられし所余も亦たその坐末
に相ひ列らあり一宴半に至て「ナルデンシキユ
ル氏余は向ふて北畠君ハ壯年あれば今一杯のライ
ニワイン(葡萄酒)を飲まよと云われ一を傍らある
日本人某れ云く否北畠氏ハ年既ハ六十歳にして壯
年ハ非らざる也と「ナルデンシキユール氏道尔と
して笑ふて云く君の六十歳あることハ我れ既ハ之
れを知る故ハ壯年ありと云ふあり抑も人生れて七

歳始めてキンド、シユール(小學校)に入り其れより二
十四五歳より中學大學を卒業して人の知る可き
ことを粗ぼ察知し是を以て學文は有れ商法は有れ
以後五十年六十年間是れを實際に試み悉く事の難
易世の嶮安を徴して始めて其の見る所を得て安心
了解して以て邦の治安を公議一人の年若を育引し
て敢て愧る所なきの壯り之を六十歳と云ふあり
故に人亦た其の徳を稱して之を邦の元老と云ふ
也今北畠君年一既に六十歳より其の學已に熟し
て尚ち之れを世界の實際に徴さんが為めは萬國を

歴經す豈に壯ありと云はざるを得んや故に我も今
ま稱して壯年ありと云ふ也歐洲の人種すべてこの
氣風を尊び人六十歳ある之れを稱して壯年ありと
云ふ也是れは就いて一概あり我も曾て千八百七十
五年に全世界中を經回せしとき日本に至り其の邦
の實況を見るに萬國史に所謂ケリーグス、イヤツパ
ンニース(戰さ好き)の日本人と云ふこととして其の人
民の氣風ハ餘程と勇敢あるに惜ひ哉其の邦の敢て
振ふこと能わざる一つの原因を見出したる如何ん
とふれば此の邦の習として人苟も五十歳とあると

自亡自棄の甚しき我れハ即ち年寄ありと占めて或
ハ山林水村の間ニ別業を營して生活の全權ハ舉て
悉く其の子ニ賦與し其の身ハ其の別業ニ住して生
涯無益の无為を樂しむ是を隱居様と稱するあり
嗚呼日本全國の老人舉て隱居様より少くも元老
壯年の氣風を養ふこと无れば邦の治安を公議し年
若を育引する者ハ果して之れを誰れとす乎此
の如きの實況よてハ假令其の邦の政治を改め其
の文明を進めんとするも恐くハ大いなる好結果を
得て他の強國と並立することハ遂ニ難うる可しと

慨然せしこと有り然るも今日北畠氏の六十歳を稱
して壯年と云ふものハ即ち歐洲人民の占稱する所
より庶幾くハ日本全國の人々も深く此の意を體
認してこの元老壯年の氣風を培養されとあらハ大
いに其の國力を鞏固し必ず其の裨益するところ有
るをば北畠君よ君も元老の一人なれば他日日
本を歸朝の上へハ先づ第一ニ此の事を説明訓督し
て日本全國の舊弊を一洗致さされよりと刺々痛
切に忠告あり呉きければ余即ち立て謝して云く此
の言實ニ我が邦の金科玉條あり必ず慈教の通り

相ひ奉ず可一と肯諾致せ一ことふれば今日無事飯
朝せ一上へハ又と此の事を懇々陳說せざるを得ざ
るあり嗟呼日本人民諸君よ何卒ぞ邦の為めは是を
迄の隠居様風ハさつたり之を放却致し度きもの
ぞり一之れを放却するは付てハ單の徒手でハ出来
ませぬ其のことハ他日便を得て説明す可けきども
諸君も少一ハ考ゑて見らきよ

瑞典國の憲法政治

法律博士「オリフクロナ」氏云く我が瑞典國の如きハ
千六百六年より同く六十六年以前は在つてハ甚だ

古風は依て未だ真は其の政理を得ざる者ハ非らざ
り一故は貴顯家と僧家と市民と農民との四部の人
民總代と云ふことを以て議員を定めて其の百政を
議事せ令めたり然るは千六百六十六年の時に至り
我が邦の文明漸く進み人亦と其の政理の在る所を
知て即ち上下の兩院を公開し全國一般人民を總代
と云ふことを以て議員を立て、百政悉皆之を其
の公議に決することありし故は我が邦の政體全
く大革して始めてヘルフワツスングモナルヒ憲法
政治の公然たる政道の真理は立つことを得て全國

人民の天幸之きを昔日より比すまば豈に宵壤と云ふ
而已あらんや然るに爰に達する迄の千思萬慮實に
一朝一夕のことと非らざりしあり然るに貴國日本
の政體たる明治二十三年に至るに愈よ是迄の舊
政を改めて全く憲法政治を立ると聞くあり實に治
國の完計是れより好きハ无き也故に何卒其の平穩
に立政有らんことを希望する也と懇々相ひ話さる
しこと有りしあり是を依て之れを考ふるに今我
が明治二十三年を以て彼れの千六百六十六年と對
すまば殆んど二百二十餘年の日子を經過せり嗚呼

文明進歩の遲速其の差ひ无きことを得ずと云へど
も我れの彼まは晚歩すること宛も二百二十餘年の
後在りと餘りの差ひふれば我が建國の大典に於
ても亦と我ま人の知識上に取りても相ひ愧ぢざる
可らざる所あるも然し其まは既往に屬したる
者あれば致し方の无きこととして措き即ちオリフ
クロナ氏の懇話の如く二十三年に至つとあらば何
卒憲法政治の無事平穩に公議正定あらんことを希
望するあり夫まは就きても獨り天子の恩眷を勞す
る而已に非ずして我々人民も亦と智料を濯摩して

成る丈けこの美舉を推輒一奉らんことを思わほ
くも有る哉余曩は獨の間に留笈せしとき兩國の
憲法立制の傳話を聞くこと有りて甚と思ふ所あり
今爰盡し難けまバ他日亦と便を竣て述る所あら
んとする也

瑞典國プロテスタント宗の改正

千八百八十一年七月三日瑞典國のストツクホルム
府に在てエルツビシヨツフ(大教正)キツチエシ師に
面したり此の師ハ原と獨逸人よして瑞典國に來り
住す即ち當國第一の大教正よして人皆云く師の

學徳の峻高あり即今歐洲全國すべて其の比匹無しと云
々成程余ハ各國を歴回して其の邦に入るときハ必ず先
づ其の邦の第一識者と及び其の第一高僧ハ必ず面話
咨問せざるハ无きあり今其の曾遇する所を以て之を
見ると今師の人とありや氣宇宏恢よして其の談論する
所の辭氣甚だ人情に切近して彼の曾遇者の談の少
く人情に遐りまざるの類に非ざるを見るあり余甚だ之
を異として深く交り結び殆ど其の淺あらざるよ
達せり一日師余に言て云く其も宗教と云ふ者ハ時と
共に相ひ適當して立つ可き者よして宛もブリツレ(眼

鏡)の其の人よ於るが如し即ち「ブリツレ」よ二つの種類
あつて一つハ「コンユアー」(中低眼鏡)二つハ「コンウエキス」
(中高眼鏡)あり其の中低とハ「□」の如き形よりて是れ
ハ壯年の人の眼鏡よりて壯年の眼中よハ液類の充牣
するが故よ其の形ち中低よ造りて之よ應ず又た老
年の眼中よハ液類次第よ枯渇するが故よ其の形ち
も亦よ隨ふて「○」の如く中高よ造りて以て之よ應
ず可きあり是を以て其の應形少よても其の度を
失ふ時其の眼鏡より亦た全く其の用を為さざるが
如く宗教の世と共よ推移一人と共よ改進すべきハ

即ち是も宗教の世よ處する所以よりて實よ眼鏡の
凹凸人の老壯よ相ひ應りて少よも其の度を誤まる
可りらざるや如き者あり凡そ宗教者たるもの歐と
あく亞とあく深く注意す可き所あり然るよ中古以
來我が歐洲の如きハ宗教の政治よ於ける最も能く
其の權衡を治めて其の文明の開進する宗教大いよ
之よ其の率先を為す所有りあり然るよ物換り
星移りて近來の世形を見るよ世の中の識見日々よ
銳進して宗徒の實力少よく陵夷し殆ど文明の權衡
を失却せんとするよ似たり此の形勢よてハ遂よ文

明の率先あひすること能あわざる而已のみ非あらず又また以もつて己おのが一家いっかを保持か持ぢすることも能あわざる可たきあり是この於おて余あ慨がい然ぜんの餘あり千せん八は百ひゃく七しち十じゅう八はち年ねんの始はめより同おなく八は十じゅう一いち年ねんに至いたるまで三さんヶ年ねんの間まが太おほい我われが全ぜん國こくの宗しゆ旨し（プロテスタント）を改か良りやうし悉しつく其そのの習しゆ弊へいを一いつ洗あらして再またび其そのの權けん衡へいを改か鮮せんするこを得えり云い々させり是こを即すなわち即すな今こん歐おう洲しゅうに於おて宗しゆ教きやう改か正せいの第だい一いち率りつ先まずあるものよして「キツチエン」師しの卓たく見けん世せいは尊そん稱ちやうさる、所以ゆゑの者もの夫そを爰こゝに在あるあり嗚な呼こさすがは文明ぶんめいの邦くにさけあつて頃ころ日にっ獨どく逸いつ國こくに於おても亦また「コンチー

ル」僧しゆ徒との大たい會かいを建たて、太おほい其そのの改かめんとする所ところある由よし、其その他ほか亦また各國こくごの近ちか況かうを見み聞きするは何なにれも宗しゆ旨し改か良りやうの梅つばき蓄ちくを開ひらき發はつせんとするの意いあり是これ亦またた歐おう國こくの文ぶん明めい世せいは稱ちやう譽ぎよさる、所以ゆゑのもの其そのを爰こゝに在ある歎なげ然ぜんるは我われが日にっ本ぽんの八はち宗しゆを見みるは舊きう株くわ依い然ぜん果くわして其そのの為ためす所ところふらんとするが如ごとし庶あ幾いくハ我われが全ぜん國こくの人民じんたる者もの深ふかく注ちゆ意いせざる可たりらざる所ところあり扱あて瑞すい典てん國こくハ歐おう洲しゅう第だい一いちの「アイゼン」鐵てつを生なじ又またたチントホルツ」木き燧たいを出だすことも亦また第だい一いちと稱ちやうするあり然しかるは此この邦くにの鉄てつたるや實じつは其そのの性せいの堅けん良りやう

天竺行記 卷之三
其の工妙を究む
る上其の鍛職の者も亦た頗る其の全良あること
る故に一切刀劍の類に於て其の全良あること
此の邦を以て歐洲第一と稱するあり小ざく之れを
比例すれば我が日本にてハ泉州堺の刀類を以て日
本第一と云ふが如きあり而して彼れハ世界第一と
れハ日本第一の分あり而已又と其の木燧を輸出す
ることの最も多數あるハ是れ亦た歐洲第一と稱す
るあり以上瑞典國ハ其の邦小ありと雖も其の見る
所の多きを以て其の一二を乗記すること此の如き
也其餘小國の如きハ左の之見る所の无きを以て

皆之れを畧省するあり因て以下ハ再び墺國に入
るの事實を陳す可きあり
英國を發して再び墺國に入る
同年七月二十八日午後第八時「アツパベトホルト、プレ
ース」の二十八番地を發して同國「クインズホルク」と
云ふ港に著し第九時同港を發し海上十時間を経て
翌二十九日午前第七時頃「阿蘭陀國」の「フリーシンゲ
ン」と云ふ港に著し此の度ハ「阿蘭陀國」(阿蘭陀國ハ過
日既に経回せし故に)ハ直通りよりして其れより「プロ
シヤ」「バーデン」「ビヨッフテンベルヒ」「バワリヤ」等の邦々

を歴て遂に塙國の「マインツ」に至りあり此の間の
艱車きんしゃハ扱てく惘り入りまゝ如何とあれバ此の
間の鉄道ハ素とより小徑鉄道と稱して艱車も甚ど
小あること宛も日本の新橋發の艱車位ひの者より
て其の行くことも亦と甚ど遅漫ちまんある而已のみ非らず
此の間このまに於て十一回其の車を乗り替かへり土人で
さへも事ことは因よてハ十方とくも无なき所ところに持もつて行いける程
の事ことふれバ他邦人たこくにんハあを更まら注意ちやういせずバつまらぬ
所ところに持もつ附つけられて仕方の无ない事ことが屢しばしばバありしと聞
く實まことに困難くわんなんある道中みちのちゆうと云ふ可たがきあり是こゝより再び

塙國「ウイン」府ふに至り兼あて親おやのあるウンガリヤ
ホテル（旅宿）に投なげ種々慰勞いろうさまで始めて長路ながちの疲つか
勞あつを休やすめたり
夫おとこより先まづ日本にほんの公使館こうしつかんを相あひ尋たづね踵かかとで「プロフ
エツシヨルスタイン」氏うぢの家いへを尋たづねし所ところ同おな氏うぢハ既すでに
避暑へきふの為ために「ワイトリ」村むらの別業べつぎやうに至いたられし
と聞きく故ゆゑに翌あつち二日ふたひ午前まへひる第八時はちじの艱車きんしゃに乘のりドスタ
イン氏うぢの別業べつぎやうを叩たたき即すなはち氏うぢに面あひ互たがひに暫しばしばくの別べつを話わ
し相あひ喜よろこぶこと涯はたあり「スタイン」氏うぢ云いく北島君きたじまよ君
ハ年とし既すでに六十歳むそくさい然しかるに彼かれの有名ゆうめいある「アタランチ」

クの大洋を來往して亞米利加に至り又と再び歐洲
に立ち飯り更ニ我ガ墺國に來りたまふこと宛も此
の世界を小手毬の如く思ひたまふや何ぞ豪氣の壯
大ある其の上ニ身體の少しも恙がなきハ實ニ賀す
可きの至りあり今夕ハ久方振りよて晩食を呈す可
し緩々話して長き旅の勞を慰し玉へとて懇篤な
る佳饗ニ圖らす時を移せしあり
「スタイン氏と結約する事」
翌朝又と「スタイン」博士を叩き余博士に請ふて云く
我も先年來獨逸國に於て取調べらるる所の條件之

れを悉く其の各國の實際に徴して今其の槩數を知
ることを得たり然して今再び爰に來る所以のもの
ハ庶幾くハ博士我が曾調する所のものをも更ニ再論
裁決して我れをして飯朝の後ち苟も事を採るの日
少しの差謬无うらしめんことをと云ひけきハ博士
欣然として膝を打て云く諾我れ將さ日本のため
ニ如何にも其の事を師と熟議せんとするあり然る
に我もふ一つの願ひあり我も曾てより亞細亞の事
（佛儒二教のこと）を聞くと欲して亟む之れを其の
人（日本人）に求むまども甚と太に粗對して未だ其

の要領を得ず然るに師幸に爰に來る實に我が素志
を果す可きの秋至るあり我が悦び亦と云ふ可り
らざる也因て晝に我れ師の為め話すべし夜に師
我が為め話せらまよと云わき故に余も亦に其
の意の懇到あり感して遂に其の事を然諾したり
然るに以下「スタイン」氏の説に間く之を乗記する
こと有り云へども余が話の如きは敢て之を畧
除するあり

「スタイン」博士云く今日歐洲の強大にして亞細亞の
微弱あるに畢竟して文明の開否に是を因る所なり



て其の文明の開否に全く是を政體の如何に因るも
のあり然して文明に即ち是を其の政治の治徴に
て希臘にてハ之を「コルトア」と云ひ獨逸にてハ之
を「ビルドング」と云ふあり然るに近古以前に於て
歐と無く亞と無く其の政體は悉皆「ウエントリ
ヒ、ゲワルト、モナルヒ」無限の威勢政治と云ふ政治に
て有り一所に我が歐洲の如きは政理益々進んで其の
舊政の如きは悉く之を廢棄して即ちヘルフワツ
キング、モナルヒ」と云ふ新鮮活潑なる憲法政治に改
まりて歐洲一般の文明皆是を此の政治より顯發

する所のものとするあり即今歐洲の強大なる所以
のも唯是を此の一舉に在るあり然るは亞細亞地
方の如きは今以て其の舊政を堅守して敢て其の改
むる所を知らざる者の如し又と甚だ如何がある申
し方なきども其の地方の人の如きは文明と云ふ名
なきも未だ之を聞わざれば其の真利を知ることに
ハ尚わ且つ遠く遼々あり是を即ち亞細亞全部の遂
に微弱なる所以のもの全く此の一事に因るあり然
るに聞く所は因まば日本獨り振然として其の舊政
を放斥し新と憲法政治を建て、大いに其の文明

を興起せんとする由一謂つ可し亞細亞洲中文明の
第一率先ありと嗚呼日本人民の天幸實に賀す可き
の至りあり其を就て日本の政治家の如きは素よ
り論を疎たず又其の僧家と云へども余程其の改む
る所有らざるまば其教法を將來に維持することの難
き而已ならず亦た邦の爲めにも其の裨益する所あ
る可らざる也故に北畠君よ庶幾くハ邦の爲め
深く注意あらんことをと全地球上に就て先づ西歐
東亞の闇明隆衰する所以の原旨を懇々告示せらる
たり余以爲く此の話ハ甚だ平易に似たりと雖も凡

天竺行各尺所見
卷之三
三十一

そ此の世界を治めんと欲するものハ桑門かんまと云へど
も亦た深く意を用ゆべきの大本あり

是より約やくの如く晝ハ余百事ひゃくじニ附つて博士の裁判さいばん話を聞き夜ハ余博士あしニ對たいして印度いんどうと「ロソフイ」の原意及及び漢學の大意を述ゆして互たがひひ相あひ止やまざるこ
と宛あやも一線いっせんの綫いの如ごときあり然しかして博士の述のぶる
所ところのものハ博士自みづから書いて以もつて余あニ與あふ即すなはち遂つい
ニ積つんで數卷すうせんの層かさを為なすニ至いたり實じつニ我われガ宗教改
良りやうの舟楫ふねあり

「スタイ」博士云々北畠君きたはたけよ即すなはち今いま宗教の政治と人民

とニ附つての關係かんけいを詳つめよせんと欲ほせば宜よろしく先まづ
其の政治人民の何なにニ物ものとすることを能よく詳つめよして
然しかして後のち其の關係かんけいの如何いかにを知るべき也然しかるを其
の政治人民の何なにニ物ものたるを知らずして偏ひとニ宗教の
關係かんけいを談だんせんと欲ほするハ宛あやも其の斗量とらうりやうを辨わぜず
て其の菽麥しやくばくを測そらんとするガ如ごとく遂ついニ其の功こうを全
ふすること能あわざるガ如ごときあり故ゆニ先まづ其の政治
人民の何物なにものたるを知して然しかして後のち始めて其の宗教
關係かんけいの如何いかにを知る可べきあり
宗教政治同異の辨わ

一日「スタイン」博士余に問て云く北畠君も抑も政治と宗教とハ同一に立つ可きものとするや又た離れて立つ可きものとするや如何ん余答て云く夫は宗教政治の相ひ離す可あらざる所以のものハ宛も楳鼓の相ひ應ず可き者の如きあり是を以て知る宗教政治ハ共ニ同一にして立つ可き者とするあり又た其の政治宗教の相ひ離して立つ可あらざるハ宛も楳鼓の相ひ離る可あらざるが如きあり博士問て云く然らば其の同一にするに云ふもの之を如何に同一にするや詳う其の意を示さまよと余答へて

云く苟も之を同一にするに云へば共ニ之を同一にする而已此の上へ別ニ同一にする仕方の有る可き筈つ无きあり博士云く然らば北畠君も今君の言の如くあらむ甚だ我が問意を解ぜざるに似たり因て我も今君の爲めニ政教同意の大數を述べんとすらあり凡そ古より以來の政體を見るに大いに分きて二つとあるなり其の第一説ハ政教ハ同一たりべしと云ふこと又た第二説ハ政教ハ相ひ離して立つ可しと云ふこと其の初めハ同一と云ふに付て亦と分きて二つとあり其の一ハ宗旨を基として

政治を其色より同一にして政治を立つる之を「テオクラチー」(希臘の言也)の政治と云ふあり又その一ハ政治を基として宗旨を其色より同一にして政治を立つる之を「チエーザルパピイスモス」(希臘の言也)の政治と云ふあり此の中「テオクラチー」の政治ハ古代亞細亞地方の邦々より多く行われし所の政治にて歐洲は於ても古代往々此の政治を行わしむ其れ等の舊政ハ漸くは廢棄して即今もてハ歐洲一般チエーザルパピイスモスの政治を相ひ用ゆることとあり然るは今より二十年前迄ハ羅馬法皇

の伊太利國を領せし時ハ尚此の「テオクラチー」の政治を用ひられしが其の邦を伊太利帝は奪はれてよりハ法皇ハ唯一大本山の法皇と云ふ止まることあり然る所歐洲は於てハ即今土耳其國の「コンスタンチノーブル」府の「マホメット」宗の法皇のミ獨り尚此の政治を用ゆるあり以上この「テオクラチー」と「チエーザルパピイスモス」の區別ハ畢竟して宗教政治を互ひし後と先きとするの違ひより建つ所の名よりて政教同一の義ハ素より同一ありと知る可きあり次は其の第二説の政治

宗教ハ相ひ離して建つ可しと云ふハ是れを果して
政治の眞理ニ非らざる 一種の學者の僻見ニて此の
説の如きハ古來より文明の邦ニハ實際ニ行はる可
き筈ハ无きあり然るニ歐洲と云へども其の未だ政
理の開けざる以前ハ尚ホ此の政治を行ふものあり
と云へども即今ニても政理ますます開進して此の如
き政治を用ゆる邦ハ一ヶ國も是れ无きあり然るニ
亞細亞地方の如きを即今尚ホこの政體(上ニ云ふウ
ンエンドリヒゲワルトモナルヒ)にて政教相ひ離
まゝ政治あり)を用ゆると聞くあり就中支那の如

きハ其の邦最も大國ニして此の政體を頑守して其
の四隣の小國も亦と自ら之れニ摸倣して多くハ皆
其の政體を用ゆるあり是ニ因て亞細亞地方の暗
昧爰ニますます谷まれるなり然るニ日本の如きハ明
治二十三年ニ至れば斷乎として其の摸倣政治を抛
擲して始めて憲法政治を建ると聞く實ニ亞細亞第
一等の卓見と云ふ可きあり其れニ付てハ北畠君ニ
此の度日本ニ於て建る所の政典ハ之れを小ニ云へ
バ日本の治本と成り之れを大ニ云へバ亞細亞全部
の規本とも成る可き實ニ大切ある 一大美舉ニして

此の擧若一全く擧る時ハ他日必ず亞細亞全部を率
ひて彼の歐洲と對峙して敢て少一も譲らざるの位
地ニ達す可きあり豈ニ快然の至リニあらずや其れ
ニ付て此の政教同異の分ハ如何ガ建てらるゝ歟ハ
知らぬガ此の建て方が實ニ本國治本の第一歩一
て一朝之れを容易看は誤まら時ハ他日必ず如何と
も回救す可らざるニ至らん嗟呼日本の人民々々
もの深く注意す可き所あり其まニ付ても北畠君よ
聞く所ニ依れば是ままで流弊せら日本の宗教ある
バ餘程改洗せざれば又ニ致一方ハあるまいと思は

まます君ハ桑門の第一隗あまバ必ず其の為す所あ
らんことを切望するありと懇陳されり余深く感
する所あつて云く諾我は他日皈朝せば必ず正ま
為す所ある可一と對忍と
以上擧る所の「テオクラチ」と「チエーザルハピイス
モス」と「ウンエンドリヒ、ゲワルト、モナルヒ」との三種
の政治法の原意を詳らよすること、又之をを歴
史上ニ説き明らすこと、其まニ付て宗教上の心得
方の有る所等ハとても爰ニ一々述べ盡し難けまバ
我が別記ニ譲る可きあり他日見る可一

政治宗教天然の關係

「スタイン博士云く其の宗教政治同一の義ハ上之
を述ると云へども其の同一なる可き眞理を詳
せざる可らざるあり之を就て「ピロソフイ」家
の言ハ「カオザール、ネーキステ、ツイツセン、キルヘウ
ンド、スタート」と云ふことガありて其の「カオザール、
ネーキステ」とハ天然の眞理ヲ關係すると云ふ意
ハして是即ち宗教と政治と云ふものハ政治ヲ
天然上ノ宗旨ノ關係を持たねをあらす又ノ宗教
も天然上ノ政治ノ關係を持たねをあらぬと云

ふ意味あり此の義を就て博士の詳細ある説述こそ
ありと云へども今爰之を辨ずるときハ甚多
冗直らんことを恐るゝ故之を畧除する
り又此の義を就て其の夜話の節余印度「ピロソフ
イ」と歐洲「ピロソフイ」との區別を述べ所博士
始めて印度「ピロソフイ」の深遠にして且つ詳明な
ることを頻りに感悦されて互に夜の閑あることを
覺えず實に面白きこととて有りありこんあこと
も所謂内ち鼠みよて日本計りよすつこんで居りて
たとても此の如き面白き世界の眞理を知ることハ

ならぬぞのー畢竟博士の「ピロソフィー」を聞きとれ
むこそ我が持ち物(印度「ピロソフィー」)の深き味ひの
有ることぞ知まこと云ふ者あり今又之を爰に
詳のふすること能ふれば他日便を埃て具陳す可
し

然るは博士云く其の宗教政治の同一は於てハ同一
ハ素より同一と云へども其の同一の建て方又就て
ハ強ち杓子定規ハ參らざるあり是を以て獨逸國
の立政の如きハ或る部分ハ之れを同一し又或る
部分ハ之を相ひ離して然して以て其の同一の主

義を全ふすることを得るあり我が墺國の如きも亦
た此の意に摸倣するの外他无きあり其の各國の如
きも亦と多少の參差之れ无きこと能ふざるものハ
其の政治宗教を天下の活物と相ひ應ず可きの大活
法あればなり政治家宗教家とものハ深く此の意
を體認して宜しく其の處する所有らざるを得ざる
ありと云々嗟呼日本八宗の僧徒果して之を如何
んとうり思ふや

博士云く其の苟も文明の政典を擧んとするときはハ
此の如く政治と宗教と云ふものハ決して切り離あ

して措く可きもの非ずとする以上ハ此の二つの
者の間ハ互ひ其の「エーヘンリフスト」(蘭語)一
てつりあいと云ふこと)の權衡を得て決して「アンタ
グニツセ」(蘭語)一てふつりあいと云ふこと)の不權
衡ニあらぬやうに互ひ深く注意せざる可からざ
る也是を以て政府ハ妄りニ宗旨を陵躓して獨り己
れが意を偏張す可ならず宗旨者も亦ニ妄り政治ニ
抗對して獨り己が意を偏張す可うらざる可く互ひ
は能く從容相ひ和して其の同一の主義を全ふす可
きふり然るは今日日本の爲め之れを考ふるは他日

若し政府が寺の爲め左の三條(一ハ「ゲゼツツ、イ
ーベル、ユリジーション、デヤ、キル」ハ、とて寺の法律の
爲めは政府が規則を出さることニハ「ゲゼツツ、イ
ーベル、ジ、ヘルワルトング、デヤ、キル」ハ、ヘルメーゲン、
とて寺の身代の爲めは政府が規則を出さることニハ
「ゲゼツツ、イーベル、ジ、グラウベン」とて寺の信心
の中へ政府が規則を仕込むこと)とて手を著けて其れ
此の如くせねばあはぬ是れハ此の如くせよと種々
指圖をなるときは其のとき寺ハ單に唯々として沈
黙して居ることハあはぬ也若し苟も沈黙して居た

ありて其のとき即ち宗旨と云ふ者ハ頽壞して一も
ふ也若しや宗旨が頽壞したるは人心忽ち校悍の
意を現し人世遂は暗昧の世とあらんときハ豈に
獨り宗旨の頽壞のし止まらんや亦た遂は天下の
大切は波及を可き也歐洲は於ても各國の政府苟も
政治の改正を言ひ出るときハ必だ此の三條を
入れる也然るに日本は於ても此の度ハ歐洲風の憲
法政治を建ると聞けば必だ又た歐洲風は宗教上
手を入れるものも知れざれば宗旨者たるものハ豫
此の(キルヘレヒト宗旨の規則)ことハ能く之れを詳

明に修正しおざれば豈に獨り宗旨の爲め而已な
らんや實に天下の大事なりと懇に告示されたり余
今ま此のことを爰に乘記するものハ我が邦の如き
ハ即今新舊二政代交の境界にして實に一大事の秋
あれば此のことよ就てハ政教二家の人々ハ深く注
意あらんことを希望するなり若し苟も一朝之を
粗鹵に過つて他日如何んともなること无きの大失
墜を惹き起るときハ我が天下の不幸是れより大
るハ无きなり
博士又た云く此の如きの不幸を救わんとするとき

ハ日本の宗教家たる者ハ先づ第一ニ非常の大改革
を行ひ宗政をして時機ニ契當せ令むるニ在リ是れ
即ち凡僧の行ひ得る所ニ非ズ又ニ第二ニ時世開進
の大學校を建起して僧家の智識をして世の中の識
者の上ニ立た令むるニ在るアリ是れ亦ニ葛僧の為
し得る所ニ非ざる也嗟呼日本の僧家此の二つの者
を行ひ得ざるときハ全國の宗教ハ遂ニ腐敗ニ皈
て然して有力ある他國の宗旨の爲りニ轆轤されて
日本の人心ハ日々日本より放れて皆な悉く他國
ニ散り行く可し其の時ハ失敬あらざら日本國と云ふ

ものハ亦と遂ニ敗亡をること有らん乎北畠君よ
實小本邦の一大事あり深く注意し玉ふ可し其れ
付て余日本の爲りニ其の方法を述ぶべしとて凡そ
六ヶ月間ワイトリシガ村の別業ニ於て晝夜兩度
づゝ談論筆與せられざる者スタイン博士の直筆積
んで三卷あり是れ即ち我が宗教改良の三畧なり然
し今爰ニ是れを述ぶるニ違ま非ざるあり然るニ今
此の談話中ニ有力なる他國の宗旨ニ軌轢されて日
本の人心ハ日々日本より放れて皆な他國ニ散り
行くと云ふ一條ニ於てハ實ニ宗教上ニ就ての邦の

大事あり余博士と種々熟議せしことあり便宜を以て述ること有る可き也

政治宗教は就き獨英墾佛伊の小學校

博士云く抑も其の邦を治安せんと欲するときは能く政治と宗教の部分を修正するに在り其の修正するの道は最も小學校を以て其の元始とする也是れ

は就て今獨英等二三邦の小學校の校則を述べて其の義を話せんとするふり然るは彼の英國の如きは「ゼ

ミナール（小學校師範學校）を建て、小學の教員を教養

すること有りと云へども其の規則は於てハ小學中

はハ宗教も僧徒も之れを入れざる也又た佛蘭西の如きは英國の如く宗教ハ小學校ハ之れを入るをざる而已ならず其の上ゼミナール（を建ると云ふこと

も無く其の小學校員の撰び方と云ふ者ハ甚だ粗漫

として其の算術と書くこと、及び讀むことガ出來

さぬをれば誰もても教員たることを得る而已は非

ず又た或ハ賄力を以て此れハ入ることを得る者有

りと云ふ也是を以て其の教員ハ其の僧徒（僧徒ハ世

の中の文明のことと通じて居る故に）の輕呑陵蔑を

受けて宛るも自ら立つこと能わざる者の如し其れ

故は僧徒ハ恒ハ小學のことハ之れを左右して扱ふの弊習ありと云ふ也伊太利の如きハ其の小學校の規則ハ全く佛蘭西ニ模擬して之れを建ると云ふども僅り三十年來のことなるまば其の法未だ太だ修成せず其の教員と爲る可き者も一層卑淺より亦甚だ僅少ありと云ふ也獨逸の如きハ今より二百八十年前第六世「フデレリツキ」の時始りて小學校の制度を立て、人生れて苟も七歳となまば一月ハ必ず小學校ニ入る可し若し苟も此の制度を奉ぜざるるときハ必ず其の父兄を罰を可しとの嚴令を下され

たり是れより以來全國の人民肅然として苟も七歳とふれば必ず小學校ニ入るを人の常典と心得ることとなり也其の上は「セミナール」の師範學校を建立てして其の教員を育養をること亦た頗る精密にして其の教條中ハ宗旨上の教科を精入して其の道德を育生をること亦と頗る精密なり然りと云へども其の教員の其の師範學校を卒業をるも直ち其の教員たることを許さず正しく之れを用ひんとするに當つてや尚ほ「ゲマインデ」(人民社會)に於て撰舉委員を立て、其の教員を票撰をること必要

るが故に其の小學の教員たる者實に識徳具全にして
 甚だ人民の尊信を得る而已に非ざり又僧家と云へ
 とも敢て之を陵蔑せると云ふこと无きなり余博
 士自ら言ふ以爲らく即今歐洲全部の小學制度なる
 者獨り獨逸を以て最も能く備具を云ふ可き也我
 が奥國の如きは素より小學校は宗教は既に之れ
 を入ると云へとも未だ甚だ修成せざりし所今より
 四十八年前都て獨逸小學の校則は模倣して其の
 ミナールを設立せることより及び宗旨を輸入せる
 こと等に至るまで一切悉く之れを獨制し倣ふて少

しも異なること有ること无き也是に於て我が邦の
 校則も亦た頗る善良に至りたりと云へども獨逸の
 如きは既に二百八十年來の久しき之れを修成させ
 たり我が邦の如きは僅か四十年來の追進しして進
 むる則ち進んだりと云へども我が全國中の小學校
 の如きは尚ほ「コンフェツシヨン、ウント、コンフェツ
 シヨン、ロス」と云ふて此の中の「コンフェツシヨン」と
 ハ宗旨を入れたる小學校と云ふ意又た「コンフェツ
 シヨン、ロス」とハ宗旨を入まざる小學校と云ふこと
 ありて即ち宗旨を入きたり又た宗旨を入れざる小

學が有ると云ふことより未だ獨逸の如く全國一般小學の宗旨を入まざる校の無きが如く能々密に且つ盡せるより尚ほ及むざる所有るなり嗟呼小學の建構既此の如く差等あるを以て其の文明の度分らざるも亦と及ばざる所あるハ素より免る可あらざるの事實より今日墺國人民の振然として勉むる所以人の者ハ専ら爰に在るなり然しおがら英佛二國の制の如きハ未だ其文明の如何人を談むるは足らざるなり北畠君よ今日此の如き世界の權衡は當つて日本の如きハ奮然百政を大正して大

ひよ亞細亞地方は雄飛せんとするの秋あれば別して此の小學の制度ハ最も第一は注意すべき所なり此の制度の如何は因つて遂に邦の明暗を為す可きものなまは實に憾む可きことぞか」と云々此の小學の「システムチー」組織は付てハ種々取調りこと有れとも爰でハ盡し難きをハ聞き度き御方ハ拙宅を御出なさいよ

北畠云く此の如き博士の懇陳ハ實に我れ等宗教改良の原案文明開進の金鐸と云ふ可き者也如何んとおれは其れ小學校の「エレメント、シユール」と云て「エ

天竺行路記

卷之二

レメントトハ原素と云ふこと「シユール」とハ學校と云ふことふして然れば小學校ハ即ち原素學校と云ふことよして凡そ人生れて七歳よして小學入り始めて人の道を學ひ是れより智識を養成する所の大原たるを以て原素學校と云ふなり此れは依つて之を云へハ人世凡百の事物この大原を修むるを以て其の元始とするなり是を以て人苟も正人端士たらんと欲するときは必ず此の校に入りて初歩とするあり其れ故に上り擧る所の文明正大の各邦何れも此の校を開建して以て其の民人を育引す

るの始めとす實に蘭菊其の美を争ふと云ふべき也凡そ其の邦を見んと欲するときは唯其邦を以て偏小之れを見てハ邦の可否と云ふ者の決して見得べきもの非を却て偏信其の大体を誤まること有らん歟故に苟も其の邦を見んと欲せば必ず他の邦を擧て以て其の邦を見るときは對見批判して其の可否の甚た見易きハ素より其の論を俟たざる所なり今博士の話は因て獨英等の建校の可否を此見するときは其の得失死一と云ふ可らざる也此の如き文明の邦よして尚ほ其の得失死一と能わざれば

其の他野蠻半明の邦に於ては素より其の所あり然るも我が日本の如きの維新以來百政日々改り百事益々新たならざるの死と云へども其の中我が民人を育引するを以て最も其の一大至要とせざるあり如何んとなまば假令ひ百物の改まるも民智發育せざるときは果して之を運用をることを得ざればなり然るも我が政府の如きの此の育引の道に於て其の心を盡さざるも非ざると云へども其の事日淺きが故に未だ其の可に至達せざるを以て去年十二月更に文部を改良して大いに爲を所有らんとせらる

あり人皆云く天子大いに此の育引の道に心をを用ゆると嗚呼育引の道の人を大成せらるの次順よりて原素學校即ち小學校を以て其の元始とせれば日本若し此の學制を振張せんとせるときは宜しく上より云ふ所の各邦學制の可否を對問し其の得失を比判して其の不可ある者の斷乎として之を芟去し其の可ある者の之れを採取して以て我が建立せらる所のものを參考助發して假令ひ各邦の制度と云へども敢て一步も譲らざらむ可き也博士云く教育の道一朝之を誤るときの他日之れを如何んとも救ふ

可あらざるの大害を惹起せんと云々北畠云く嗚呼
小學の人世進歩の初歩實は慎む可きの大始ある哉
「スタイン」博士の雑話

博士云く上は獨英等の小學校のことを述べーが我
れ六十年來歐洲にあつて其の小學は宗旨を入れた
ると又た入まざる邦の實状を熟見をるふどうして
も入れざる邦(英佛)の人民は慄悍は入れたる邦(獨墺)
の人民は信實あり其の故を如何んとなれば其の宗
旨と入まざるの教への唯智は偏長をるが故は其の
人とありや自ら慄悍あり又は其の宗旨を入るゝの



教への智徳を兼具をるが故は其の人とありや自ら
信實あり是を以て苟も小學を起さんよ必ず宗旨
を入るを以て要とせざる也如何んとあまハ人の信を
導き道德は入ることを教あるの宗旨は如くもの先
一其上を神佛の「ベウストザイン」神佛の有ると云
ふことを感知するを云ふなりを感知をまハ現未二
世の心掛け厚くなるが故は政治上は於ても亦は大
いある利益を生をれむ也
又云く日本の政府の如き日々は文明は進むべー
然るは其の僧徒たるもの其の文明の何は物たるを

知らず徒と漠然として居るならばとても日本の宗教の保持をること難き而已ふらむ遂に壊敗は飯を可し實は注意をべき也又云く其の文明の何は物の處を知らんと欲せば其の智識と道德と教育との三つの性質を能く審了を可きなりとこの三つの性質のこと今爰は詳悉す可からむ龍が別記は具載されば他日便を俟て述ぶ可し
又云く之れは就ては學校教員と僧徒の持ち場と云ふことを判然たらしむ可きなり是れ皆亦大切なること也政治家宗教家たる者深く注意せざる可から

ざるありと其の悉しきこと龍が別記あり
又云く凡そ政府の文明の日々進をるに僧徒たるもの徒だ暗昧沈睡して之を關をる所以んを知らざるるときは人民と云ふものの唯感して言ひ出すことの能わざる者あれば自然政府の文明は導かれず宗教を信ざる心の菲薄なるは是れ實際の勢ひありて之れが即ち宗教敗却の原因となり此の敗却の又と回轉して遂に政府の敗蓄を萌發をることになりて邦の不幸を來たすは又た實際の勢ひあり憾心せざる可けんや

又云く余日本の近古以來を考ふるは徳川三百年來
 偏に鎖港を堅守して少くも世界の文明と云ふこと
 は注意せざりし故に邦の文明と云ふものが全く湮
 滅したり其れ故に第一人間の自由と云ふ運動を從
 ふて失却したるあり又た其の教育の進歩も就ても
 神佛の「ベウストザイン」(感知)を結び附けることを忘
 失せし故に邦の順序と云ふ者が解散したるあり實
 に慨歎の至りありあらむや斯くふる上は知識や文
 明而已しての所詮此の舊染を救ふこと能わざるは
 立ち至りたり遂に貴國の為めは采らざる所なりと

云々然るは之れを救ふの方術は於ては博士は委詳
 き説あり即ち我が別記の如く龍云く其れ順序ハ一
 切邦を治むるの原則ありて假令如何なる文明と云
 へども苟も之れを失せるときは文明も文明も非ず
 邦も亦さ邦も非ざるあり嗟呼天子も之れは依りて
 以て其の位は立ち民人も之れは依りて以て其の分
 は安んずることを得るもの也謂ふべし順序は邦を
 治むるの第一國珍ありと
 又云く今日世界の權衡を以て之れを云へば貴國は
 於てハ一日も早く邦の文明を興起し邦の順序を失

却せざるやう為さ可き也又た此の際に當りてや其の僧徒たるものハ其の憂塊を救ふを以て職とをべき也然して之れを救ふの道の先づ他邦の文明即ち歐洲の文明を來て以て我が邦の人心に結び附け以て之れを己れの物と為し之れを己れの物と合せ其の文明あるもの全く日本固有の文明とありて此の文明の力から轉然として彼の他邦に向ふて以て屹立對峙するも足る之れを「ナトア、ベウストザイン」能く文明の意味を得たと云ふ意と云ふなり然るは是れまでの日本人の大和魂とか云ふて我れハ即

ち日本人ありといむりこみりの「スタイル、ツムハイ」トと云ふて其れの仕方の兎い蠻野人と云ふものよして今日の右等の暗頑のむつむり改捨して早く其の所を為し玉へり歐洲の大言家云く全亞細亞の命脈ハ蓋し今後二十年の内ち在らんと果して其の見る所あつて之を云ふ歎知る可らずと云へども即今東西の現状を以て之れを云ふときハ或は是れ兎とも云ふ可うらざる也貴國も頗る東洋中の高眼果して之れを何とか思へるやと云々龍今この話を爰に示すもの日本にあり居てハ實に夏

虫の氷を凝ふと云ふ(莊子に在り)の類ひありて内のこと計り考へ(上よ云ふた)「コンクレートの考へ」で居り少しも外の邦のこと等を考へ(上よ云ふと)「アブストラクシヨンの考へ」ぬやうな事での廣く現今のこととを話しても亦と遠く將來のことを話しても百事狭少暗昧ありて話しの解りませねば是れより先ん身を保つことも邦を護ることも何よむることと為るまいと思へり日本人諸君よ庶幾くの深く懺心せられんことを

「バンドラビクセの話」

一日午後第一時「ワインナ」府の「ビシヨッフ、グートシヤウ」(即今奥國第一の高僧)師余が「ワイトリンガ」村の寓居を尋ねられし故先づ取り敢えず「カツフエ」豆茶を點して笑談相ひ和むるの末に「グードシヤウ」師云く北畠君よ即今日本の實況を見るは宛も「バンドラビクセ」の函を開けたやうな者よ非ざるや如何んとあらば此の中「バンドラ」とい女の名ありて「ビクセ」とい函の名あり此の「バンドラビクセ」の話の古昔一二千四五百年以前は希臘のポリテイスマス(多くの神を祭る者流を云ふ)の人の組み立てたる話よ

して其の話は云く爰は「チヨイス」と云ふ天の神あり
 此の世界の荏苒として移り變るは従ふて人間のだ
 んく惡奸なるを悲み即ち憤然として云く我れ一度
 び此の世界中の人を鑿殺して更は善良の人民を造
 らんとすと此の時「プロノートイス」と云ふ神が之れ
 を嚴しく止めて云く少く恕せよと「チヨイス」云く
 如何ん「プロノートイス」云く凡そ物先づ充分の之れは
 教養を加えて然して後ち彼れ尚ほ惡奸あるとき
 即ち彼れの罪あり今大神の慈仁未だ充分あらずし
 て之を罰せんと我れ大神の為めは太だ采らざる

所なり我れ今之れを考ふるは大神の慈惠未だ世界
 の爲めは火を興るざるを欠典とざる也其れ火の世
 界の珍寶文明の大本なり庶幾くの速うは之れを興
 へられよ百民必む其の開達をる所あつて此の如き
 不良の爲さざる可き也若し之を興ふるも彼れ尚
 ほ不良ならば其の時大神の意は任を可しと云へど
 も大神敢て之を容まざるなり是は於て「プロメー
 トイス」竊うは天子昇ぼり火を采り来つて之を世
 界中に賦與せられけむば人皆ふ此の火を得て大い
 は其の智了を開覺し百用悉く文明は達せんとざる

なり然るも「チヨイス」大神其の我れも竊くは火を采
り来りしを怒り何れも兎も角一旦之れを妨げて人
民を不良に陥し入れ然して後ち之れを全鋤せんと
して即ち「プロノイイス」を罰して先づ之れを「アウ
カゾース」(希臘の高山)にして今も地圖書其の名を存
せる也」と云ふ高山は縛ぎ措き然して後ち天の昇り
一人の女を「イデアーリン」(美備)に造り立つることよ
造り其れは「ビクセ」と云ふ函を與えて下地は下らん
とせるは「際」天の諸神種々(文明女紅病氣狡猾等)の
餞贈ありしを皆な之れを函中に入れて云く汝が下

地に至るとも必む之れを開く勿れと戒められさり
彼を下地は下り「プロメートイス」の弟「エピメートイス」
と云ふ神は嫁せられし所其の後ち夫妻計つて之れ
を開きしは其の函中より種々不可(文明狡猾病氣
惘難等)の物が飛び出せしは付き是れより世の中は
於ていろく苦惘あることが生じたりと云へども先き
は火の賦與せしは因て文明の開進を有むべし人皆
あ之れを具ふる所以を知るが故に「チヨイス」の策
遂は行わむざりし也此の如く函を開くや否や可不
可の物雜起せしと云へども文明の力から能く之れを

區別して其の不可を撲ち退けたりと云ふ話の主義也即今日本も之きと同トく維新の始め「バンドラビク」の函が開いて以来た不可(文明やら鐵道やらコロリやら狡猾慥悍等)の物が雜來(歐洲より反對に入り來る)して殆ど其の區別を失ふことを最要とせざるの秋あり若し苟もこの區別を失いて文明やら狡猾を妄信雜行されたるら遂に日本の大害を惹起せん歐洲より入來る物トやとて皆不可といふ云へまをいさすまは北畠君よ爰が區別を可きの大切な所でありまをといふこと故に余邦の爲め深く信じて大

いは感謝する所あり也嗟呼他國の人でさう文明の大家の此く云ふて呉ねます況や日本人民たる者我が「アートルランド」(父母の邦)の爲めに深く憾心せざる可けんや

區別に付ての大事

道龍云く右に就ての種々區別を可きこと之き有りと云へども殊に注意を可き精神上の區別あり如何んとなれば右函が開いてより歐洲より入り來りた精神の「ゴツプ」(頭)に在りと云ふ然るは我が地方に於ての精神の「ヘルツ」(心臓即ち腹)に在りと云ふ也

あ大變トや同ト人の一つの精神が東人も之を腹
に在りと云ひ西人も頭も在りと云ふて其の居所甚
ご一定せず同一雜來物の其の中でもコロリヤ狡猾
位ひふ者あれば又た我々の手もても如何やうとも
處致の出来ることも有ねども何よを云ふても世界
第一の大切物たる此の精神の居所が二つに分れて
い大變トやいつそ誰れ歟を頼んで一方は方付て貫
ふ歟又た誰れのを頼んで折合を著けて貫ふた者で
有らふ歟全体どうしたら可からふ歟トやと云ふて
中々容易に折合ら著きまよまいと云ふも西人も

西人で何んぞ込み入りたことでも有ると「イヒ、ヘヤ
スタンデ、アイネコツプ」と云ふて私の「ゴツプ(頭の)理
解した私の頭が兼知したと云ふて頭を叩ひてりき
んで居り又た東人の東人で何んぞ話しのつゞまり
よなると私の腹に入りた私の腹が承知したと云ふ
て腹を叩ひてりきんで居る此く外交日進の今日若
しも彼此の話しの版着が頭と腹へ所を異ふして落
ち込むやうなことで後には不都合が有りるさま
い歟其の上る條約改正とて人民雜居とか子ありて
いどんな食ひ違ひが生むるかも知れません(ちと大

笑ひ言ひ方おれども（雑來尚ほ日の浅き其の中より早く一つ又なるやり又致し方の无き者歎日本全國の諸君よ何れ此の裁判を印度日ソフヒ一家たる日本のお坊さまが為さねばならぬ所あり然し今この無學のお坊さまでいとも六つ敷らふと存ドまを）つゞまり宗旨の全類をる所以なり其れは就ても早く日本の宗濁を大洗し此の如きことハ速く區別判然して日本諸君をして早く此の冗惑を了開せしめたく思ふら生が改正を急ぐ所以の一原なり道龍云く「ガソツ、エヤデ」（全地球上）の人ハ皆不是人

よして人悉く四支九竅ありて一支一竅の欠けたる人のあること无き之を「アツレ、グライヒ、ペルソーン」（都テ同一の人と云ふこと）と云ふ也此の如く人皆不同ト人よして其の精神の居所は於ける此の如く頭と腹との食ひ違ひは居る可きの理あらんやいづき其の居所も亦と同一よ飯せざるを得ざるあり我れ之をが為りよ注意をること殆んど三四十年來なり然るも古昔一釋尊の阿難舍利弗等は向ふて精神の在所を問わねしよ阿難等の答へ遂に十箇所精神ら頭は在りと云ふの説も既よこの十所の内は在

る也（も）及んで尚ほ未だ之れを決（けつ）するること能（あた）わざり
 一こと有り此の時印度（いन्द）は二派（ふた）の「アラマ（あらま）」（外道あり一）
 つハ「イデアールイスモス（い）」（無形を主とせる者流）一つ
 ハ「マテリアルイスモス（ま）」（有形を主とせる者流）あり
 此の中（こ）ウ「マテリアルイスモス（ま）」の教（や）名（な）グ印度の文
 明（めい）と共に土埃（と）は入り其れより羅馬及び希臘（ろま）は亘（わた）り
 て遂（つひ）は歐洲一般（いっ）をして精神（せい）の頭（づ）は在りと云ふの説（せつ）
 を為（な）さしむ然るは近世（きん）に至り有名（ゆう）ある「ピロソフイ
 」家（け）たる「ヘルマン（へ）」氏（し）更（さら）は印度の「マテリアル家（け）」
 論（ろん）の説（せつ）ヲ因りて此の精神頭（せい）は在りと云ふことを巨（こ）

細（こ）き説（せつ）き示（し）めさるると云へども此の説（せつ）たるや原（げん）と
 印度より追（お）ひ出（だ）されて來た所の者（もの）をバ之（これ）を分（わ）
 折（せつ）して論（ろん）ト詰（つ）めると實（じつ）は淺薄（せん）なる説（せつ）ぞかし嗟呼（さ）歐
 洲（しゅう）の如（ごと）き文明（ぶん）ハ則（すな）ち文明と云へども頭（あたま）を叩（たた）ひて精
 神（しん）と云ふが如（ごと）きハ實（じつ）は大笑（たい）の至り也余今度（この）び在（ま）歐
 中諸國（ちゅう）の大家（たい）と此の（こと）を論（ろん）查（さ）をるは一つも信（しん）を
 るは足（た）る者（もの）无（な）かりし也いづれ此の（こと）ハ他日（た）六字
 名義（めい）と云ふ書二卷（し）を著（しよ）して以て委（く）く説（せつ）示（し）を可（か）き也
 故（ゆ）は今（いま）ハ之（これ）を略（りやく）す
 外教（がい）を信（しん）むべきハ外人（がい）と親（お）むる便利（べん）と云ふの説

一日「スタイン」博士の席に會して即今の際日本人が
外教を信ざれば外國と親むる便利ありと云ふの話
も及ぶ也龍令その時の槩意を爰に述んよ抑も即今
我が日本に於て間々言ふ者あり云く我が人民外教
を信ざれば外國と親むる便利ありと此の言果して
然るときは其の外教と云ふ者の各國各種よりして太
だ一定せず然るも今日日本に於て其の外教と云ふ者
は果して何れの邦の宗教を指さや又た親むるとハ歐
洲中何れの邦及び何れの人と親むを云ふや又ハ便
利といは是れ亦た何ん等の便利を云ふや倘し之れを

英國の宗教を信じて英人と親むる便利と云ひ又た
或ハ獨逸の宗教を信じて獨逸人と親むる便利とす
と云ふならば先づ英國の宗教を以て之を云んよ
其ま合衆大英國(英倫と威爾斯と蘇格蘭と阿爾蘭の
四ヶ國を合して合衆大英國と云ふ也)中英國の如き
ハ「エキスコッページ」の「プロテスタント」宗を以て國教と
も其れを反して蘇格蘭ハ「プレスビテリアン」宗を以
て國教とシ阿爾蘭ハ専ら「羅馬カトリック」宗を以て之
れを信奉する也此の如く一國中その宗と異なる所の
者各々異にして是等の宗旨互に相ひ轢陵すること

宛も秦楚の互に相ひ抗するが如き者あり又た獨逸國の如きハ「ルーダプロテスタン」宗を以て國教とすとの云へども「羅馬カトリック」宗や猶太宗を以て信奉する者亦た太だ多數なり其の上へ二十六聯邦中索遜國の如きハ全國都て「羅馬カトリック」宗を信奉して少しも獨逸國教の宗規に尊順せざる也是れ等の宗旨も亦た互に相ひ轢陵すること宛も趙魏の相ひ容れざるが如き者あるハ所謂る似て非なる者を相ひ嫌ふの所為にして是れ皆一國同民の内教にして尚ほ此の如く然り若し又た露西亞と獨逸を以て

之を云ふときハ曾て彼得斯堡(露西亞の都府)に至りしとき海軍の大將兼參議「ブーチャチン」云く我の希臘教の如きハ真に神の親教と云ふ可き者なきども彼の「ルーダプロテスタン」宗の如きハ彼れ原も大貧困僧にして黄金を貪婪せんが為なり切りに神經を芟除したり切りに妄言浮説を画造して一宗を開立する杯ど、云ふことハ天神の大罪人なり實に信む可りらざる者の「ルーダ」教あり等と其の相ひ容をざるの太き宛も氷炭に於けるが如き者あり是を即ち邦と邦との派流を以て之れを云ふも亦と復と

此の如し其の他各邦の如きハ驟して知る可き也嗟
呼原と是れ同一源の教にして其の支流は於て此の
如く相ひ轢陵をること却て疎遠なるブジイスモス
佛敎は於けるよりも尚不_レ太だ甚だしき所以の者ハ
所謂_レ其の似て非ある者と嫌ふの所為_レして迺ち
紫の紅と奪ふを惡むと云ふ者其れ是を等の類を云
ふ歟凡そ外教の各國は於ける其の實際驟ね此の如
し然るを外教を信ざれば必_レ其の親みを得る者と
して日本流の小抄子定規の考つを以て妄り之を
を信ざるとも或ハ一郷の人民とい且_レ親みを得る

有るも他の一郷の人民とい其の親_レを失わざると
得ず又た假令_レ一國の人民と且_レ親みを得る有る
も又た他の一國の人民とい其の親_レを失わざると
得ざる也如何んとなごバ一郷の教を信ざれば他の
一郷の教ハ其の反對_レは立ち又た一國の教を信ざれ
ば他の一國の教ハ其の反對_レは立つを以ての故急な
り是れを以て之を云へバ各國の各教を各信して
各國の各人と各親をることハ有名なる筒井順慶先
生と云へども恐_レハ之を果_レ得ること能わざる
可き歟又_レ假令_レ其の一郷の教を偏信して其の一

郷の人と其の偏親をるを得るも我が全國(日本)の又
安と確持をる程の親よハ餘程不足たる可し又た
よしや一國の教を偏信して其の一國の人と偏親を
るを得るも亦と他の各國の人之をと隱妬疑視して
其の慮る所あるときを又た我が日本の大親と全ふ
ざる所以人の得策よ非ざる也然るときを外教と
信ざれば外人と親むよ便利なりと云ふものハ果し
て何等の言とやせん實よ采るよ足らざる先誓の邈
言と云わざるを得んや廻ち下等人民の如きハ且く
之を措く其上等世界よ於て或ら邦の元老(多年

原書等を理解して天下の人民と教養せる人等)とか
或ら邦の宿望(多年政治)よ參與して邦と補けし人等
とか最も邦の國幹たる人々の中よ或ら此の言を
明稱して易々少しも省る所なき者あり其の意果し
て何等の意ぞや益し此の一新奇言を以て自ら計る
よ汲々として我が邦の大事を熟思をるよ違ま有さ
る為め歟何よせよ邦の元老宿望とも云はれる人が
餘り軽忽玩誓の至り也話しが段々爰まで進んご所
で滿堂大笑然たり(該談の取意是よ於て「スタイン」
博士云く上みよ云ふ所の親(外人と親むと云ふ者

なりなる者ハ必竟无識狭少の親みよして我ガ日本
の為めは太だ采らざる所なり然るは即今日本廣く
各國各宗の來入を黙許して些少も之れと拘距する
所なし是れ實は公平と云ふ可き也其の上へ若しや
條約改正も成り其の來入を公然明許されたるなら
む東洋第一の卓見國たる所以よして其れこそ各國
の各宗は對して宗旨上の親睦を全ふするは足ると
云ふ者なり是れ即ち日本宗旨上の大親を全ふする
は足ると云ふ可き而已然りと云つども此の宗旨上
の大親と云ふ者ハ永年累久遂は其の邦を維持する

は足ると如何ハ次下は於て辨む可き也
以上外教を信むれば外人と親むは便利なりと云ふ
の得失と沙汰をること此の如き也以上槩ね「スタ
イン氏の意は基く也」
以下の宗教上の親睦天下を維持するは足らむと云
ふことと述べる也是も亦た「スタイン氏の意は基く
なり」
上は云ふが如く宗旨上の親睦を全ふしつゝこれを
我ガ天下を維持するは足ると思ふは大いなる方鑿
圓柄の食ひ違ひ也凡そ邦の國幹たるもの此の間は

中りて^中歧惑^岐踟蹰^蹰をること勿^勿れ如何^何んとなれも假^假令^令
ひ此^此の如^如き宗旨^宗上の親睦^睦を之^之れを修^修むること有^有る
も若^若し一朝^朝邦^邦と邦^邦との間^間は於^於て苟^苟も其^其の利害^利得失^失
は亘^亘る事^事の發^發現^現を有^有るときは兩國^兩忽^忽ち對抗^抗激論^激
して遂^遂は戦^戦ひ以^以て其^其の利害^利と決^決せざるを得^得ざる有^有
るときは其^其宗旨^宗上の親睦^睦を以^以て其^其の論^論尖^尖と理^理解^解休^休
止^止せ令^令むること能^能わざるも古^古來^來歴^歴史^史上^上は於^於て識^識者^者
の知^知る所^所なり然^然らば則^則ち宗旨^宗上の親睦^睦と云^云ふ者^者を
我^我が天下^天を永^永遠^遠と維^維持^持するは足^足らざること亦^亦た知^知
る可^可き也^也今^今其^其の一^一二^二を擧^擧て之^之れと云^云へば獨^獨逸^逸と瑞^瑞

西^西とい同^同一^一なるル^ルータ^タプロテスタ^タン宗^宗よして共^共に
是^是れ同^同宗^宗親睦^睦の邦^邦なり然^然るは千^千六^六百^百年^年の頃^頃事^事故^故あ
りて英^英略^略ある瑞^瑞西^西王^王ゴスタ^ターフ^フア^アードル^ルフ獨^獨逸^逸
逸^逸帝^帝「ベルジ^ルナ^ント」第^第二^二世^世の時^時ありを伐^伐つ此^此の時^時き
佛^佛蘭^蘭西^西の太^太政^政大^大臣^臣「レシ^ロイ」此^此の人^人を僧^僧徒^徒よして「カ
ル^ジナ^{ール}」の位^位に在^在りし也^也が初^初めを金^金と出^出して瑞^瑞
西^西を援^援けしが后^后ち兵^兵を出^出して之^之れを援^援け遂^遂は歐
洲^洲中^中有^有名^名の大^大戦^戦は及^及びたり然^然るは佛^佛蘭^蘭西^西の如^如きハ
羅^羅馬^馬カトリ^リツク宗^宗よて瑞^瑞西^西とい素^素より異^異派^派无^无親^親の
邦^邦なれども却^却て之^之を援^援けて大^大ひは獨^獨逸^逸の軍^軍を伐^伐

一こと有り是れを以て之を云へば瑞獨との同宗の邦よして此の如く瑞即ち獨を伐ち佛瑞の異宗の邦よして此の如く佛却て瑞を援けしこと有り又た露西亞と希臘カトリック宗土爾其の「マホメット宗」よして素より異派あり又た英國の「プロテスタント宗」よして上み二國(露土)と異派あることを是れ亦と人の知る所なり然るは千八百五十六年の頃露土兩國の間は於て一朝事故ありて露大ひは怒りて遂に土の「セバストポール」を伐つ此の時英國其の利害の遂は己を及ばんことを恐れて自ら獨佛の兩軍を率

て露兵を土の「セバストポール」に伐つて大ひは土を援けたり是を等の軍戦の皆な是れ同宗の邦よして相ひ戦ひ異宗の邦よして却て之を援けたる也是れは依て之を云へば假令ひ同宗親睦の邦と云へども其の邦の利害得失は依ては或は以て之を戦えざるを得る又と異宗の邦と云へども或は以て之れを援けざるを得ざるを皆な是れ其の邦の利害得失は依て生る所の者なり然らば則ち其の宗旨上の親睦と云ふ者ハ此の如き邦の利害得失等の際に中てハ少くも其の功力を持てること能わざるや知

る可き也

然して此の邦と邦との利害得失の際に中て其の邦の安寧を持つこと、全く常時は政治上の治術は在りと云ふ云ふの博士詳悉に余は説き示さまたりと云へども余は政治家は非ざれども今爰は略を聞き度か人そか出であさね

然して宗教の政治は與かり文明は關する所以の事、理を詳りにすることを余が別記は乗在せり他日便を疎て述ぶ可き也之れは就て西半の宗教は能く文明と其の權衡を得ねども東半の宗教は遠く文明と

其の楚越と為すと云云嗟呼我が人民諸君は如何に文明の食ひ違ひが有れむとて西教の獨り文明は權衡を得るは局り又た我が東教の獨り文明は權衡を得られざるは局るの理あらんや又と其の上つ西人の金人にも非ざる可し我が東人の木人にも非ざる可し均しく是れ人なれば何んの權衡の采れざることと之を有らんや然るは此の如く東西の遷庭と為さ所以の者の必竟して彼れの之れを勉め我れの之れを勉めざるより此の食ひ違ひと為さ至る而已決して別種の原因ありて然る所以は非ざるなり

是れ即ち龍が悲憤慷慨矢を折り誓を建て断つて云く我れ之を救いざるを將た誰り能く之を救はんや我れ必だ此の佛教を改洗して此の権衡を大正を可しと我が人民諸君よ且く我が爲を所を見よ文明を興さんとせざるよを廣く歴史は通達を可きこと

一日「スタイン」博士云く今日全世界は於て西と先く東と先く苟も此の文明を興さんとならむ先づ歴史上は就て「チビルガチラン」(開化)と「コルトア」(文明)との意味を知ら令るを以て急務とせざる也之を知らん

とせざるよは先づ歴史は二た通り有ることを知る可き也一は「ゲシヒテ、デヤ、ヤウロツペー、ジーセン、スタツテン」(歐洲各國の歴史と云ふこと)一は「ヤウロツペー、ジーセン、ゲシヒテ」(歐洲一般の歴史と云ふこと)なり初め歐洲各國の歴史といは是れは歐洲各國各種の歴史よして即ち佛蘭西、英、利、斯、獨、逸等の各自のことに乗載されたる歴史と云ふ也(此の各國の歴史は皆己が邦のことに主と志て書くを原意とせ是れ即ち各國歴史の体裁なり)此の各國の歴史は即ち日本や支那の歴史等(其のこと柄と年時は編著して唯た編

年事實の止る書き方を「コロニース」と云ふ是れハ原と希臘の言バふて唯だ時のありさまを書くを云ふ也の書き方とい大ひ異あり即ち獨逸歴史を以て其の一例を云へば先づ我が邦の今日現在のチビリサチオン(開化)ハ原と「アルトヤレ(大過去)の希臘羅甸羅馬等の開化より此の如く經移し此の如く遷移し來りて即今此の如き開化を保つことよなり今此の現在の開化(開化と云ふ者の決りて立ち止る者非らどと云ふハ歐洲一般歴史發行の第一主義あり)も亦と將來ハ如何が開進を可きやと

云ふ所を深く感知せ令り頗る人心を發育興起せりと以て第一主義とをるが故に歐洲各國の人民は於て能く此の「チビリサチオン」の意旨を解得して其の文明教育の何よ者たると又た人間の順序と云ふこと、又た道德の何れも在ると云ふこと、を領知するが故に此の如く萬國は卓越したる文明の結菓を發育したる也亦た此の如く萬國は卓越したる民人の氣力を興越したる也是れ豈に事物編年のみの歴史の能く為し得る所ならんや其れ識者たるもの此の東西の歴史上は於て此の如く逕庭をる所あり

るを知て然して后ち運動を可きなり

次は歐洲一般の歴史との其も歐洲の此の如く各種
各國は分列して發揚する所の開化は於ても亦と左
右參差有らざるを得ると云へども其の原と一つ
のチビリザチオンの大源底より來るものよいて是
れ此の源底如何んして此の如く遷移し此の如く轉
化して此の如きの現況を形容するやの秩次を其の
源意を基ひて「カオザール子キステ」(源意の秩次と
經查をること)之れと即ち歐洲一般の歴史と云ふ也
是れ此の歴史の治術の大本文明の大原よいて歴史

中實は缺く可からざるの一大要史なり然るは即今
歐洲の識者尚ほ未だ此歴史を製作をすることをを得
ぞと云へども其の學問上は於てハ此の如きの歴史
の之を有らざるを得ざるの深理は既より解するは
至達せり

然るは唯だ獨逸國のみは在りて萬國歴史なる者と
書き初めたり(歐洲中其の邦多しと云へども萬國歴
史を著せる邦は未だ一邦も之れ有らざる也と云へ
ども是れ亦た専ら我が邦の事と原意として記した
る者なれば一般の「チビリザチオン」の第一原意を領

知るるを以て大主義とせざる故へは其のつゞまる
所の我が邦を原意とせざるは歸せねが即ち是れ各國
歴史の大なる者と云ふ可き也未だ歐洲一般の歴史
と云ふ可らざる也

即今獨逸國に於て萬國歴史と云ふ者五部あり

一はハ「ウエーベル」萬國史二十一卷 二はハ「シロ

ツセル」萬國史十九卷 三はハ「ベツケル」萬國史十

六卷 四はハ「オンケン」萬國史四十五卷 五は

ハ「ローポルト、フオン、バンケ」萬國史この史は獨逸人

たる「バンケ」當年八拾四歳氏の書く所にして即今唯

だ二卷だけ出版せり以上の五部の皆な是を獨逸出

來にして他の各國は未だ此の萬國史を書く者一

人も死し是れは依て獨逸の學度知る可き也

右話のつゞきは就て博士「スタイン」氏云く此の如く

歴史の階級あることを領知するとき自ら「チビリ

ガチラン」と「ゴルトア」の分界あることを領知し得べ

し人苟も此の二つの者の秩序と領知し得るときは

遂に開化の治域は達することを得べき也如何んと

なまば抑も此の開化の中は其の文明の何れ者た

ると又た何ん等の主義を以て此の政府と云ふ者を

組立てたる々と又た世の中は於ての宗旨と云ふ者の
の決して缺く可からざる所以との三大至要と知
ることとを得る之れを真全の開化と云ふ也眞全の開化豈に唯ど
知識のみを琢磨して之れを文明と云ひ之を開化
と云ふの類ならんや失敬なら即今日日本の原書を
讀む人々や或は此の「チビリザチオン」と「ゴルトア」の
語位を混解して居らるゝ故へは何より唯ど一科に
依て其の知識を琢磨する之を直ち文明と思ひ
開化なりとして太ど此の二つの者の際畔を雜同さ
るが如し實にお氣の毒なることよて其を以て遂に

邦の大識と發揚し邦の大治を興起せること
ざる可き也是れ等のことと善く明詳に領知せんと
さるときは廣く歴史學を恢復せざる可からざる也
北畠君よ此のことハ政治家宗教家たる者と深く意
を用ひねばならずぬ所なりと余此の話と聞て立て謝
して云く此の如き話ハ我れ等本邦に於て未だ曾て
聞かざる所にして實に我が邦の爲めの金科玉條と
云ふ可き也嗚呼其れ歴史學の世に裨益ある其れ宏
大なる哉之れに就て博士余も書き與へられし者數
多ありと云へども今ハ之れを略する也我が日本の

識者其れ深く注意せられんことを大希は堪はざる也

以上述る所の第一第二巻は於ては日本と發してより以來た歐洲各國の實況及び遂は此の塙斯土利國に入り博士「マタイン」氏と日夜論説する所の槩數と述ること未だ其の半と過ぎさして既は此の如く第二巻の部帙と成を至れり又た其の部數を増して之を乗記せんは此の書卷の發行餘り遲回して世の人望は垂らんことと恐るゝが故は是は於て筆と閣せざるを得ざる也是を以て今回の此の塙國と

發して「ウンガリ」國「土爾其」希臘「羅馬」及び「伊太利」國等のことハ都て之れと略し他日天竺行路次所見續編二卷を制して以て其の略所を再乗を可き也

同年十月二日午前第七時塙國の「ジート」バーンホフより發車して「ウンガリ」國より「土爾其」を経て「希臘」小至り遂は「伊太利」に入り同十三日午前第七時頃「羅馬」著し「ホルテラホスト」と云ふ旅宿に投ぐる也其れより公使館と尋問し續ひて有名なる「羅馬」の本山を初め所々の名所古跡と點見したり此のことハ他日續編と換て委く述を可き也同二十日夜第十一時

羅馬と發し二十一日午前第六時「伊太利」の「ブリンジ
 ー」港に着き同二十五日午前第四時英國の「ペオコ
 ンパニー」(會社の名)の「モンゴリヤ」艦に乗じて「ブリン
 ジー」港より印度に向ふて發航せり

天竺行路次所見卷二

上書其亦...

